社会言語科学　第26巻第1号
2023年9月　78-93ページ

The Japanese Journal of Language in Society
Vol. 26, No. 1, September 2023, pp. 78-93

研究論文

# 人は神の声をどのように聞くのか
## ―カトリック教会の場合―

小 川 俊 輔（県立広島大学）

現代において，人は神の声を聞くことができるのか．できるとすれば，それはどのように可能なのか．本論文はこの問いに答えようとする．主な考察の対象は日本のカトリック教会である．旧約聖書や現代小説には，神が人間に語りかける場面，神と人間とが直接ことばを交わす場面が繰り返し描かれてきた．しかし，聖書，教会文書，カトリック司祭の著述などによれば，現代を生きる私たちは神の声を物理的な音声として聞くことはできない．他方，聖書は聖霊の働きによって書かれたものであり，それがミサ聖祭において朗読されるとき，それは現存する神が直接会衆に語りかけているのだ，と教会は考える．そして，信徒が聖書，特に福音書を理解できるよう，教会そして司祭は様々な努力を払っている．その具体的な方法の1つが，司祭による福音書の解説，すなわち「説教」である．ミサにおける「説教」は司祭だけが行うことができると定められている．「説教」の他，「聖変化」や「ゆるしの秘跡」など，司祭は教会から様々な権能を与えられている．それらはいずれも神と人間（一般信徒）のコミュニケーションを媒介する役割を担っている．司祭はそのことにより招来する権威性に自覚的である必要がある．

**キーワード：** 聖書，ミサ，司祭，一般信徒，権威

# How People Hear God's Voice ?:
# A Case Study of the Catholic Church

**Shunsuke Ogawa** (Prefectural University of Hiroshima)

Can people in today's world hear the voice of God? If they can, how is it possible? Focusing on the Catholic Church in Japan, this study attempts to answer these questions. In the Old Testament and in modern novels, scenes in which God and humans exchange words have been repeatedly depicted. However, according to the Bible, official documents of the Catholic Church, and writings of Catholic priests, people living today cannot hear God's voice as physical sounds. The Church considers the Bible to be written by the Holy Spirit, and when it is read at Mass it is considered to be the living God speaking directly to the congregation. The Church and priests endeavour to help believers understand the Bible, especially the Gospels and one way priests do this is by delivering sermons. In addition to sermons, priests carry out roles such as the undertaking of consecration at Mass and the sacrament of forgiveness. All of these are seen as actions which play the role of mediating communication between God and laymen. This study suggests that because of these factors, priests need to be aware of their authority.

**Keywords:** Bible, Mass, priest, layman, authority

## 1. はじめに

### 1.1 文学作品における神と人間との対話場面

> 司祭は足をあげた．足に鈍い重い痛みを感じた．それは形だけのことではなかった．自分は今，自分の生涯の中で最も美しいと思ってきたもの，最も聖（きよ）らかと信じたもの，最も人間の理想と夢にみたされたものを踏む．この足の痛み．その時，踏むがいいと銅版のあの人は司祭にむかって言った．踏むがいい．お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている．踏むがいい．私はお前たちに踏まれるため，この世に生れ，お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったのだ．（遠藤，1981:219）

これはカトリック信者であった小説家・遠藤周作の代表作『沈黙』の一場面である．棄教を拒んでいたポルトガル人司祭ロドリゴがいよいよ踏絵に足をかける直前，彼はイエス・キリストの声を聞く．

このような場面を描く小説作品は枚挙にいとまがない．洋の東西を問わず，神話の時代から現代に至るまで，数多くの芸術作品が神と人間との対話場面を描いてきた．このモチーフは連綿と受け継がれてきた人類史上の伝統とも言えるが，さて，このような神と人間の対話は，あくまでフィクションの世界の話であり，現実には起こりえないのであろうか．

### 1.2 本論文の目的，方法，資料，調査

本論文は，幾多の宗教の中から，世界最多の信者数を抱えるキリスト教，特にローマ・カトリック教会を対象として，定性的方法による理論的考察を通じて，人は，神の声を，いつ，どのように聞くのか，その際，司祭はどのような役割を果たすのかについて明らかにすることを目的とする．この目的を達成するための資料・調査は次のとおりである．

(a) カトリック教会が公式に発表した諸文書，(b) カトリック司祭によって書かれた書籍，雑誌論文原稿，ラジオ原稿，インターネット記事などの諸文書，(c) 国外（南米）・国内における一般信徒，修道者，司祭に対する聞き取り調査[1]，(d) カトリック行事への参与観察[2]，(e) その他．

### 1.3 先行研究，本論文の位置づけ

「宗教と言語」の関係については，神学，哲学，宗教学，民俗学・文化人類学などの分野において膨大な研究の蓄積がある．以下では，本論文の分析・考察に関わる先行研究をいくつかを取り上げたい．まず，戸田 (1975:8) は，宗教的な言語表現の特徴として (1) 象徴的である (2) 逆説的である (3) 類比的である (4) 暗示的である (5) 隠喩的である，の5点を挙げ，全体として「ある特定の行為に駆りたて，実践にむかわしめる遂行的 (performative) 」な表現であることを紹介している．他方，谷口 (2019) はハイデガーの思索全体を宗教の観点から分析する著述である．その中心課題として宗教における言語の問題が議論され，「宗教において核心となる事柄は人間の救済ということであるが，この救済が人間を超えた次元からの「語りかけ」という形で与えられるところに宗教の根本性格が存する」(227) と述べ，唯一神からの「啓示」がなされるキリスト教・イスラームと，人間が自ら「問い抜き究明する」(227) 仏教とを比較している．

以上のとおり，「宗教と言語」の関係については，研究の蓄積が進んでいるものの，現代人は神の声をどのように聞くのか，聞けるのかについて，1.2に示した種々の資料によって分析・考察を試みた研究は，管見の及ぶ限り，皆無である．近年になって「宗教体験」や「神秘現象」を言語行為やナラティブの観点から捉えようとするSakaguchi (2015) や伊藤 (2022) などの研究が見られるようになったが，本論文が対象とする「神の声」のようなものは，（日本の社会言語）科学的な考察の埒外とされてきた．以上のような研究史にあって，本論文は，「宗教体験」や「神秘現象」に対する社会言語科学的な研究の活性化につながることが期待される．

## 2. 神の声は聞こえるのか

### 2.1 現役カトリック司祭の見解

#### 2.1.1 百瀬文晃神父（イエズス会司祭）の場合[3]

まず，新約聖書「ルカによる福音書」3章21-22節

から，イエスが父なる神の声を聞く場面を引用しよう．

> 民衆が皆洗礼を受け，イエスも洗礼を受けて祈っておられると，天が開け，聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た．すると，「あなたはわたしの愛する子，わたしの心に適う者」という声が，天から聞こえた．（聖書，2001:(新)53）[4]

これはイエスが洗礼者ヨハネによって洗礼を授けられた直後の場面である．このテキストを素直に読めば，イエスは神の声を物理的な音声として聞いたものと解釈される．しかし，百瀬文晃神父は，この箇所について次のように解説する．

> 「天から声が聞こえた」と述べられていますが，それは必ずしも音声的な声であったと言うわけではありません．むしろ，より深い意志の伝達です．わたしたちはときどき祈りの中で「神さまの声に耳を傾ける」というような表現を使いますが，それは比喩的な表現であって，本当に音声として聞こえるかのように思ってはなりません．音声として聞こえれば，それは幻聴であって，病理的な現象として説明されるものだからです．（百瀬，2021:22）

百瀬神父は1989年に創設された日本カトリック神学会の設立発起人であり，長年にわたり上智大学神学部教授を務め，日本におけるカトリック神学を牽引してきた人物である．百瀬神父は，神の声は物理的音声としては聞こえない，という．

#### 2.1.2　山元眞神父（福岡教区司祭）の場合

山元神父はカトリック福岡教区の教区司祭である．カトリック誌『聖母の騎士』に掲載された「カトリック入門」の記事から，同神父の解説を引用しよう．

> この4人の方々には，入信の秘跡へと導くそれぞれの出会いがあった．神が直接に人に声をかけるようなことはほとんどない．神は人や出来事を通して自分との出会いに導く．その時にはわからないが，振り返ってみると「出会いの時」があったことに気づかされる．それがきっかけで，すでにともにおられる主に気づき，その主について行こうと決意する．それが洗礼を受けるということだと思う．時々その出会いの時を思い起こすことが出会いを続けることにつながる．（山元，2022:5）

山元神父によれば，神の人間への働きかけは「人や出来事を通して」行われるという．

#### 2.1.3　片柳弘史神父（イエズス会司祭）の場合

片柳神父はマザー・テレサの存命中に彼女の施設でボランティア奉仕を行い，マザーの薦めを受けて神父を志し，2023年3月現在においてカトリック宇部教会などの主任司祭を務めている．著書が多く，『こころの深呼吸』（2017年刊，教文館），『やさしさの贈り物』（2020年刊，教文館）は2018・2021年の「キリスト教書店大賞」（第1位）に選出され，本人による公式Twitterには2022年9月27日現在で124,317人のフォロワーがいる．以下は，カトリック誌『心のともしび』からの引用である．

> キリスト教でも，言葉を話す前には，まず話すための言葉を神から受け取るための時間，沈黙のうちに祈る時間をとることが勧められる．語るべき言葉を持たないまま口を開いても，相手の心に届いて相手を慰める言葉，相手の心に響いて相手を力づける言葉を語ることはできないからだ．
>
> 沈黙のうちに神と向かい合い，自分と向かい合っていると，言葉のもとになるものが心の底から湧き上がってくる．それを，言葉以前の言葉と呼んでもいいかもしれない．
>
> 神からのメッセージは，言葉以前の言葉，まだ言葉にならない言葉としてわたしたちの心に届くのだ．（片柳，2022:4）

#### 2.1.4　現役カトリック司祭の見解まとめ

以上，3人の司祭の見解をまとめれば，神のことばを人間の話すことばのような物理的音声として聞くことは難しいということになる．1.1に引用した小説に描かれた神の声は，あくまでフィクションであって，そのような神秘体験・宗教体験は現代を生きる私たちには望みにくいということである．この点について広島市にあるカトリック教会の主任司祭に尋ねたところ「悩んでいるとき，迷っているとき，聖堂の中で一人静かに祈っていると，どうしたらいいか，どの道を選べば良いかを自ずと悟ることができる．そこに神の働きかけ，導きがある．」(直話，2022年1月19日）とのことであった．

#### 2.1.5　教皇フランシスコの解説

以下は，前項の司祭の直話と共鳴する教皇フランシスコの解説である（カトリック中央協議会，2018)．なお，引用文中の…は引用者による中略，下略を示す．以下同様．

> わたしたちは天から呼びかけているそのことばを聞き，識別し，生きなければなりません…主の呼びかけは，―まず申し上げますが―日々の生活の中で見たり聞いたり触れたりするもののように，はっきりとしたものではありません…その声は，わたしたちの心や気持ちを覆っている不安や刺激によってかき消されてしまいます…したがって，主のことばと生き方に心の底から耳を傾ける心備えをし，自分の日常生活の隅々にまで注意を払い，さまざまな出来事を信仰のまなざしで読み解くことを学び，聖霊からもたらされる驚きに心を開く必要があります…わたしたち一人ひとりも霊的な識別，すなわち「人が，神との対話において，聖霊の声に耳を傾けながら，生き方の選択をはじめとする根本的選択を行う…

これが現在のカトリック教会における神の声に対する共通理解なのであろう．しかし，聖書には神と対話する預言者の様子が描かれており，カトリック教会において「聖人」と認定された人々の中には神からの啓示を受けたとされる人物も多い．次節ではこれを見ていこう．

### 2.2　預言者，聖人，啓示

#### 2.2.1　旧約聖書における神と預言者の対話

2022年9月11日（日曜日)，全世界のカトリック教会において執り行われた主日のミサにおいて，旧約聖書「出エジプト記」の次の箇所が朗読された(32章7-11, 13-14節)．

> 主はモーセに仰せになった．「直ちに下山せよ．あなたがエジプトの国から導き上った民は堕落し，早くもわたしが命じた道からそれて，若い雄牛の鋳像を造り，それにひれ伏し，いけにえをささげて，『イスラエルよ，これこそあなたをエジプトの国から導き上った神々だ』と叫んでいる．」主は更に，モーセに言われた．「わたしはこの民を見てきたが，実にかたくなな民である．今は，わたしを引き止めるな．わたしの怒りは彼らに対して燃え上がっている．わたしは彼らを滅ぼし尽くし，あなたを大いなる民とする．」モーセは主なる神をなだめて言った．「主よ，どうして御自分の民に向かって怒りを燃やされるのですか．あなたが大いなる御力と強い御手をもってエジプトの国から導き出された民ではありませんか．どうか，あなたの僕であるアブラハム，イサク，イスラエルを思い起こしてください．あなたは彼らに自ら誓って，『わたしはあなたたちの子孫を天の星のように増やし，わたしが与えると約束したこの土地をことごとくあなたたちの子孫に授け，永久にそれを継がせる』と言われたではありませんか．」主は御自身の民にくだす，と告げられた災いを思い直された．(聖書，2001:(旧)74)

預言者モーセの率いるイスラエルの民が堕落し，偶像崇拝をしていることに怒った神は，彼らを滅ぼ

すことをモーセに伝える．これに対してモーセが神を「なだめて」助命を願うと，神はその願いを聞き入れる．

このように，旧約聖書では，神は直接人間（預言者）に語りかけ，人間と対話している．

さて，2.1.4に直話を引用した広島市のカトリック司祭は三位一体の神について本論文の筆者に対して次のように解説した．全能の神が直接歴史に介入し，預言者に語りかけるのが旧約聖書の時代である．イエス・キリストは，イエス自身も神であるが，全能の父である神のことばを人々に明確に伝える役目を担って父（である神）から派遣された．イエスは人間の世界で30余年を過ごしたが，宣教活動を始めたのは洗礼者ヨハネにより洗礼を受けた30歳頃からである．十字架につけられて死に，葬られ，復活して天に昇ったのは33歳前後とされているから，宣教期間は数年ほどであった．イエスの死後は，聖霊（三位一体の「父と子と聖霊」の聖霊．神の霊とも言われる）が私たちを助けてくれている．つまり，歴史は，父なる神の時代，子なるイエスの時代，聖霊の時代の3つにわけることができる．今は聖霊の時代である．

この解説によれば，聖霊の時代を生きる私たち人間に神の声が物理的音声として聞こえてくることはないのであろう．現代における神の声とは，「深い意志の伝達」(2.1.1)，「言葉以前の言葉，まだ言葉にならない言葉」(2.1.3) なのである．

他方，カトリック教会において「聖人」と認定された人々の中には，神からの啓示を受けたとされる人物も多い．以下では，キリスト教徒以外にも名の知られるジャンヌ・ダルク（聖ジャンヌ・ダルクおとめ）とマザー・テレサ（コルカタの聖テレサ）の2人の聖人が神から受けた啓示について見てみよう．

**2.2.2　ジャンヌ・ダルクの場合**

2011年1月26日，ローマ教皇ベネティクト16世はジャンヌ・ダルクに関する演説を行った．カトリック中央協議会のホームページにはその日本語訳が掲載されている（カトリック中央協議会，2011）．そこには，「ジャンヌは大天使聖ミカエルの「声」を通じて，自分がキリスト教的生活を強め，また自ら自分の民の解放のために努めるよう主から招かれていると感じました．」とある．彼女の宗教体験は，〔「大天使聖ミカエルの『声』」を聴き「主から招かれていると感じ」た〕と表現されている．「声」はかっこ書きされており，人間が発する音声とは異なることが示唆される（しかし，それが実際にどのような「声」であったかは，この文書からは分からない）．そして，「主から招かれていると感じました」という説明は，きわめてカトリック的であり，信者には理解されるが，非信者には分かりにくい説明，書きぶりとなっている．

**2.2.3　マザー・テレサの場合**

カトリック中央協議会ホームページには次の記載がある（カトリック中央協議会，不明）．「1946年9月10日：「決意の日」．黙想会に出席のため，ダージリンに向かう汽車の中で，「貧しい人々とともにいるキリストに尽くしなさい」という神のうながしを感じ，コルカタのスラムで働く決意をする．修道会を退会し，スラムで働く許可を目上に願い，その願いは，教皇庁に送られる．」

教会でも修道院でも聖堂でもなく，汽車の中で「神のうながしを感じ」たという．声が聞こえたのではく，「うながしを感じ」たのである．このことについて，マザーの修道会のホームページは英文で次のように解説している（MISSIONARIES OF CHARITY，不明）．

> On 10 September 1946, on the way to Darjeeling for her annual retreat, Mother Teresa received what she would name the “call within a call.” Over the course of the next months, by means of interior locutions, Jesus asked her to establish a religious community that would be dedicated to the service of the poorest of the poor.

汽車の中で感じた「神のうながし」をマザー自身は“call within a call”と表現している．

次に，Jesus asked herという表現に注目したい．

この表現について，本論文をここまで読まれた読者であれば，これは，「より深い意志の伝達」であり，「言葉にならない言葉」であり，啓示であると理解するだろう．だが，そうでなければ，イエスの霊が現れ，マザーに対して人間の声で話しかけて，行動を促した (ask) と捉えるのではないだろうか．

### 2.3　神の声は聞こえるのか：本章のまとめ

本章では，まず，現役カトリック司祭の著述および直話から，彼らの「神の声」に対する理解を整理した．彼らによれば，その声は，物理的音声としては聞こえない (2.1)．他方，旧約聖書の時代，神は人間に直接ことばで語りかけ，神と人間との間で対話が行われていた．神は，預言者モーセから説得され，自らの考えを改めることさえしている (2.2.1)．また，イエスの復活・昇天の後，聖霊の時代に生きる人々のうち，カトリック教会において聖人とされた人の中には，神からの啓示を受けた人物がいる．その啓示がどのようなものであったかは詳らかでないが，2.1の司祭の理解に基づいて考えるなら，それは音声として聞こえたものではなく，「感じ」られたものであったのだろう (2.2.2, 2.2.3)．

## 3.　神のことばを聞く儀式としてのミサ

「神の声は物理的音声としては聞こえない」というのが前章の結論であった．他方，カトリック信者は，ミサ聖祭（以降ミサと略記）において「神のことば」を耳にしている．そこで本章では「神のことばを聞く儀式としてのミサ」について分析を行う．

2021年12月31日時点における日本のカトリック信者数は431,100人であり，総人口126,654,244人の0.34%である（カトリック中央協議会司教協議会事務部広報課，2022）．つまり，ほとんどの日本人にとって，カトリックの宗教儀式は縁遠い存在と言える．そこで，以下では基本的な事柄についても説明を省かずに論述してゆくこととする．

1962年から1965年にかけて開催された第二バチカン公会議の成果文書として書かれた『教会憲章』は，本章で詳しく分析するカトリック教会のミサについて，「キリスト教的生活全体の源泉であり頂点である」と説明している（第二バチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会（監），2019:140）．

### 3.1　ミサの基本的構造

ミサは全世界のカトリック教会で原則的には全く等しく実施される．式次第は勿論，司祭と会衆の発言や動作も定められている．その原則や目的，方法を規定するのが，日本カトリック典礼委員会（編）(2004)『ローマ・ミサ典礼書の総則（暫定版）』（以下，『総則』と略記）[5] である．『総則』(2004:16) は，ミサの基本的な構造を次のように説明する．

> ミサは，ある意味では2つの部分から成り立っている．ことばの典礼と感謝の典礼とである…ミサには，神のことばとキリストのからだの食卓が用意され，信者はそこで教えられ，また養われる．

「ことばの典礼」と「感謝の典礼」について，それぞれ前者は聖書朗読，後者は聖体拝領がその中心儀式である．

### 3.2　聖書

ことばの典礼では聖書が朗読されるのであるが，儀式について分析する前に，まず，聖書そのものについてのカトリック教会の基本的理解を把握しておく必要がある．

聖書には旧約聖書と新約聖書があり，旧約聖書には比較的よく知られた「創世記」や「出エジプト記」また「詩編」など，様々なテキストが含まれている．いずれも，イエス・キリストが生まれる以前にユダヤ民族に伝えられたテキストである．他方，新約聖書は，イエスの生涯，活動，言動を記した4つの福音書，イエスの弟子達について記された「使徒言行録」，主に使徒パウロによって書かれた手紙，使徒ヨハネの黙示録からなる．イエス・キリストを救い主と信じるカトリック教会にとって，最も重要なのは，4つの福音書である．ミサにおけることばの典礼においても，その頂点は福音書の朗読である．他方，旧約聖書・新約聖書とも人間によって書かれたものであるが，聖書の執筆者には聖霊の導きがあった，あるいは神の意志が働いていた，とカトリック教会は教える．これを『社会言語科学』誌の執筆要

領に則って表現すれば，「神・人間（編）聖書」あるいは「神（監修）・人間（編）聖書」となる．

### 3.3　言（ことば）が肉となった

「ヨハネによる福音書」1章は，父なる神と子なるイエスの関係について次のように記す．

> 言は肉となって，わたしたちの間に宿られた．わたしたちはその栄光を見た．それは父の独り子としての栄光であって，恵みと真理とに満ちていた…わたしたちは皆，この方の満ちあふれる豊かさの中から，恵みの上に，更に恵みを受けた．律法はモーセを通して与えられたが，恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである．いまだかつて，神を見た者はいない．父のふところにいる独り子である神，この方が神を示されたのである．（聖書，2001:(新)82）

この福音書の記述が意味しているのは，神は自らのことばを人間に正確に伝えるために，イエスを人間の世界に派遣した，ということである．旧約聖書の時代には，神のことばを伝える多くの「預言者」がいたが，人間は神の掟に背き，神の愛に逆らって生きる（2.2.1の聖書引用箇所参照）．その人間に最終的なかたちで神の愛を伝え，救うために，神から人の世に送られたのがイエス・キリストである，というのがキリスト教の根本的教義である．

### 3.4　ミサにおける「ことばの典礼」

ミサにおける「ことばの典礼」では，神のことばが書かれた聖書が朗読される．『総則』(2004:16) はその朗読について次のように解説する．

> 聖書が教会で朗読されるときには，神ご自身がその民に語られ，キリストは，ご自身のことばのうちに現存して福音を告げられる．
>
> したがって，神のことばの朗読は典礼のもっとも重要な要素であり，一同は尊敬をもってこれを聞かなければならない．

これに関連して，「マタイによる福音書」18章19-20節には次の記述がある．

> はっきり言っておくが，どんな願い事であれ，あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら，わたしの天の父はそれをかなえてくださる．二人または三人がわたしの名によって集まるところには，わたしもその中にいるのである．（聖書，2001:(新)18）

ミサには勿論2人以上の信者が集まる．だから，ミサにはイエス・キリストが現存するのだとカトリック教会では考える．そして，ミサは現存するキリストとともに執り行われ，神のことばである聖書が朗読されるのである．これに関して，『カトリック新聞』の記事「教皇の一般謁見講話 聖書朗読は支えと導き」は，現ローマ教皇フランシスコの聖書朗読に関する講話を次のように伝えている（『カトリック新聞』第4421号，(1)面，2018年2月11日発行，カトリック新聞社）．

> ミサで朗読される聖書に耳を傾けることは，神が直接その民に話し掛けるのを聞くことであり，そこから霊的な支えや人生の困難な旅路に必要な導きが得られる…そのため，ミサ中の定められた朗読箇所は決して省略されるべきでなく，朗読者ははっきりと読み，会衆は常に心を開いて聴き入り，神のことばが善い行いのうちに実を結ぶようにするべきだ…私たちは耳を傾け，心を開かなければなりません．神ご自身が私たちに話し掛けておられるからです…神が私たちに話し掛け，私たちはそれに耳を傾け，私たちが聞いたことを実行に移すのです．

以上のとおり，カトリック信者はミサに参加し，朗読される聖書を「神のことば」として聞き，感じたこと・考えたことを生活の中で活かすよう勧めら

れている．

では，長大な聖書テキストのうち，朗読箇所はどのように選ばれているのだろうか．

### 3.5　朗読箇所

朗読箇所は，日曜日のミサは3年周期，月曜日から金曜日までの週日のミサは2年周期となっていて，毎日ミサに参加すれば，3年間で聖書の全容が掴めるようになっている．

また，通常の日曜日のミサの場合，聖書から3箇所が朗読され，それぞれ第1朗読，第2朗読，福音朗読と呼ばれる．第1朗読と第2朗読は一般信徒によって，福音朗読は司祭によって朗読される（朗読者については，4.1および4.2において詳述する）．その日に聖書のどの箇所が読まれるかは全世界共通に定められている．第1朗読は旧約聖書，第2朗読は新約聖書の手紙類またはヨハネの黙示録である．3.2に記したとおり，聖書のうち最も重要なのは4つの福音書である．第1朗読として読まれる旧約聖書の朗読箇所は，福音朗読の理解を深めるためにこれと関連するところが選ばれている．2.2.1に2022年9月11日（日曜日）の主日のミサにおいて第1朗読として読まれた「出エジプト記」を引用しているが，この日の福音朗読では「見失った羊のたとえ」として知られる「ルカによる福音書」15章1-15節が朗読された．

> 徴税人や罪人が皆，話を聞こうとしてイエスに近寄って来た．すると，ファリサイ派の人々や律法学者たちは，「この人は罪人たちを迎えて，食事まで一緒にしている」と不平を言いだした．そこで，イエスは次のたとえを話された．「あなたがたの中に，百匹の羊を持っている人がいて，その一匹を見失ったとすれば，九十九匹を野原に残して，見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか．そして，見つけたら，喜んでその羊を担いで，家に帰り，友達や近所の人々を呼び集めて，『見失った羊を見つけたので，一緒に喜んでください』と言うであろう．言っておくが，このように，悔い改める一人の罪人については，悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある．
> （聖書，2001:(新)69）

実際には引用箇所の後にもう1つのたとえ話が続き，その部分も朗読されたが，ここでは省略する．

さて，この福音書（朗読箇所）のメッセージの要点は，罪人が悔い改めることを神が喜ばれること，また，神は他の99人の善人を置いたままにしてでも，1人の罪人を探し求め，悔い改めへと導くことであろう．2.2.1に引用した「出エジプト記」では，神に背いたイスラエルの民を滅ぼそうとした神が，モーセの説得によりこれを改めた姿が描かれていた．つまり，旧約聖書においては，人間の罪を咎めようとする神の姿が描かれ，福音書では罪を犯した人間を捜し求め，悔い改めさせ，救おうとする神が描かれる．このように2つのテキストを朗読することによって，最も重要な福音書の理解が深まるよう，意図されている．

他方，手紙類またはヨハネの黙示録が読まれる第2朗読は第1朗読・福音朗読とは関係せず，独立しており，たとえば「ローマの信徒への手紙」が読まれる場合，前から順に，数週間あるいは月をまたいで継続的に読まれていく．

### 3.6　注釈を記した冊子『聖書と典礼』

福音書を人々がより深く理解できるよう，第1朗読で福音朗読と関係する箇所を取り上げるほかにも，様々な工夫がこらされている．

まず，日本のほとんどすべてのカトリック教会では，その日のミサで朗読される箇所をまとめた冊子『聖書と典礼』が信徒に配布され，信徒はこれを手にミサに参加する．冊子はB6判またはB5判程度の大きさで，表紙を含めて全8ページである．たとえば，3.5に引用した「ルカによる福音書」15章1-15節については，次のようにその要点を端的に解説している．

**福音朗読　悔い改める一人の罪人につい**

**ては，大きな喜びが天にある**〔イエスの罪びととの会食はファリサイ派の人々を躓かせた．彼らの批判に答えてイエスが語ったこれらのたとえ話は，イエスの行動の意味を明らかにし，神の望みが何であるかを示すものであった〕

この他に語注も付され，上の福音箇所について「**悔い改める必要のない**　自分は正しいと思っているファリサイ派の人や律法学者のことを指しているようである（ルカ5・32参照）」などと書いてある．

### 3.7　司祭による説教

この『聖書と典礼』以上に重要なのが，司祭による説教である．福音朗読のあとには，司祭は必ず説教をすることになっている．説教という語の今日的な意味としては，悪事を犯した子どもに対して，親や教師がする訓話がイメージされるだろうが，カトリック教会における説教は司祭による聖書朗読の解説を指す．『朗読聖書の緒言』（改訂版第2刷，日本カトリック典礼委員会（編），2005:26）は，司祭による説教について次のように説明する．

> 説教を行うときにも，司式者は神のことばについて固有の役割と役務を果たすのである．なぜなら，説教によって司式者は，その兄弟たちが聖書を味わい深く理解するように導き，神の不思議なわざについて感謝するように信者の心を開かせ，この祭儀の中で聖霊によって目に見えるしるしとなった神のことばに対する信者の信仰を養い，そして実り豊かな交わりに向けて彼らの心を準備させ，キリスト者の生活に求められていることを受け入れるように彼らを招くからである．

コロナ禍によってミサのインターネット配信が行われるようになり，上に朗読箇所を引用した2022年9月11日（日曜日）の主日のミサについても，カトリック広島教区の幟町教会のミサがインターネット上に公開されている[6]．このミサにおける説教は8分強の長さであった．以下はその結末部を書き起こしたものである．

> 私たちはどんな罪を犯しても，神は私たちをゆるしてくださるから，人生で希望を失ってはいけません．さらに私たちは神の子どもということを忘れてはいけません．徴税人や罪人は，自分自身の貧しさを意識していたので，神の必要性を感じて，神との出逢いを求めました．すなわち，神のあわれみを体験するために，開いている心が必要だというわけです．私たちも自分自身の貧しさを意識して，心を開いて，イエスを私たちの心に受け入れるならば，私たちの人生が新たになります．一度神のあわれみを体験したならば，それを隠さないで，聖パウロのように，みんなに分かち合いましょう．すると，私たちもイエスのあわれみの証し人になることができます．

以上のとおり，司祭による説教は『聖書』朗読箇所の要約・説明に留まらず，信者一人ひとりに回心や積極的な行動を促す内容となっている．

### 3.8　司祭による解説（書籍・新聞記事），分かちあい

さて，日曜日の主日ミサにおける聖書朗読箇所は3年で一巡する（3年周期）ことについて3.5に記したが，3年間の朗読箇所を解説した書籍が複数の司祭により執筆されている（和田，2017;雨宮，2021など）．また，週刊の『カトリック新聞』も，「キリストの光 光のキリスト」と題する記事において，その週の福音朗読について司祭が解説した文書を載せている．『カトリック新聞』を個人として購読している信徒は必ずしも多くないが，各教会の受付や図書スペースなどに置かれ，誰もが目にできるようにしている．

広島市の幟町教会では，ミサ後に（当日ではない），司祭を中心に複数の信徒が集い，司祭から福音朗読に関する解説を聞き，分かちあい（感じたこと，考えたことを参加者が一人ひとり話し，共有すること）が行われている．

以上のとおり，福音書を理解するために，第1朗読が置かれ，『聖書と典礼』による語釈と解説があり，司祭による説教が行われ，また，書籍や『カトリック新聞』誌上の解説，ミサ後の分かちあいなど，様々な工夫が実践されている．

## 4. 神と人とのコミュニケーション

前章では，カトリック教会における神，神のことばについて，聖書とミサ（特に聖書朗読）を中心に整理した．本章では，神と人との関係について，ミサにおける行為，所作，発語を中心に分析する．

### 4.1 第1朗読，第2朗読

3.5に記したとおり，ミサにおける第1朗読，第2朗読，福音朗読の3つの朗読のうち，第1朗読，第2朗読は信徒が朗読を担う．聖書朗読は「神ご自身がその民に語られ，キリストは，ご自身のことばのうちに現存して福音を告げられる」(3.4) ものである．このため，朗読を担当する者は必要十分な準備をしなければならない．

本論文の筆者は，聖書朗読を初めて担当する信徒がその準備を始めてからミサで朗読を行うまでの全過程に参与する機会を得た．この信徒は，霊的指導を受ける先輩信徒から，まず，聖書朗読に関して愛知県，岐阜県，福井県，石川県，富山県の教会を管轄するカトリック名古屋教区の中心教会である布池教会で発行され，インターネット上[7] に公開されている『典礼奉仕としての聖書朗読』というテキストを読むように勧められた．このテキストには多岐にわたって様々な事柄が書かれているが，以下では本論文の主題と直接的に関わり，神と人間（朗読者）との関係が明確に現れている2つの条を引く．

**朗読者の感情を込めない**

たとえば，パウロが書簡で何らかの勧告を行うくだりを朗読するとしましょう．こういうときに「分かっていない」朗読者は，自らがパウロになり代わり，怒りの感情を声に込め，権威を演じ，勧告を与えるように読んでしまいがちです．しかしそれは，結局はパウロのことばを朗読者のことばにすりかえているだけです．そして，そこに込められたパウロの言霊が人々の心に入っていく邪魔をしてしまうことになります．

**読む速さ**

聖書朗読はあくまで会衆に向けたものです．会衆にみことばを伝えることこそが目的なのです．ですから，会衆のペースに合わせて読む必要があるわけです…「ちょっと遅いかな」位で丁度良いのです…聖書朗読は聖堂内の全ての人に向けたものですが，その中にはあなた自身も入っています．聖堂に響くあなたのことばは，もはやあなたのことばではありません．神のことば，キリストのことばです．会衆の一人として，あなた自身もそれを受け止めつつ読みましょう．

両者いずれの条も，聖書朗読は「神が直接その民に話し掛ける」(3.4) ものであるという理解に則って書かれたものであることは明白である．

さて，前記の初めて聖書朗読を担当することとなった信徒は，主日ミサの前々日，司祭および複数の先輩信徒の立ち会いのもと，ミサの行われる聖堂内においてリハーサルを行った．その際，司祭や先輩信徒から繰り返し指摘されたのは「読むのが速すぎる」という点であった．この信徒は，主日ミサ当日の直前リハーサルにおいても，別の信徒からもっとゆっくり読むようにと助言を受けた．ミサにおける聖書朗読の早さがどの程度のものなのかについて，たとえば（注6）のミサの第1朗読，第2朗読を参照されたい．

他方，前々日のリハーサルにおいて，先輩信徒から伝えられた別の助言は，息継ぎと間についてであった．日本語の聖書は翻訳文書であるためか，一文が長い．しかし，読点のない場所で息継ぎをして間をおいてしまうと，聴衆が聖書の文言を誤って解釈してしまう可能性がある．だから，読点のない場所で息を継ぎ，間をとる場合は，誤解を生じない箇所でそれを行うように，という助言であった．

『典礼奉仕としての聖書朗読』からの引用箇所，また，リハーサルでの助言は，すべて，聖書朗読を神自身が聴衆に語りかけるものと捉え，それが最も相応しく実現できるよう意図されたものであった．

### 4.2　福音朗読

第1朗読，第2朗読が信徒によって行われるのに対して，福音朗読は原則として司祭のみが行え，その役割を信徒が担うことはできない．また，第1朗読，第2朗読については，司祭も会衆も着席したままこれを聞くが，福音朗読は全員が起立した状態で行われる．そして，福音朗読では，司祭が「○○による福音」（○○の部分にはマタイ，マルコ，ルカ，ヨハネの4名の福音書記者いずれかの名前が入る）と唱えると，これに続いて会衆は「主に栄光」ということばを唱えながら，額，口，胸の3箇所で十字を切る所作を行う．司祭のみが行えること，起立すること，特別な所作があることは，聖書の諸テキストの中でも4つの福音書が特別な位置にあることを視覚・聴覚・感覚で理解させるものとなっている．

### 4.3　聖体拝領

「ミサの基本的構造」の節 (3.1) に記したとおり，ミサは主に2つの部分からなり，1つはここまで見てきた聖書朗読を中心とする「ことばの典礼」であり，もう1つが，キリストの体である聖体をいただく「聖体拝領」である．カトリック信者は，司祭が定められた所作を行い，祈祷文を唱えることによって，パンがイエス・キリストの体になると信じている．これは「ルカによる福音書」22章19-20節などに基づく信仰である．

> それから，イエスはパンを取り，感謝の祈りを唱えて，それを裂き，使徒たちに与えて言われた．「これは，あなたがたのために与えられるわたしの体である．わたしの記念としてこのように行いなさい．」食事を終えてから，杯も同じようにして言われた．「この杯は，あなたがたのために流される，わたしの血による新しい契約である（聖書，2001:(新)77）

ミサでは，これとほぼ同じ式文が司祭によって唱えられた後，一同は深く礼をする．こうしてぶどう酒とパンは，キリストの血と体となる．広島市にあるカトリック教会の一司祭によれば，ぶどう酒は，準備や衛生面から，司祭だけがこれを口にするのが通例である．パンについては，カトリック幟町教会（広島市）の場合，次のアナウンスがなされた後，参会者に渡される．「これから，聖体拝領が行われます．洗礼を受け，心の準備が出来ているカトリック信者が，聖体を受けることができます．」

自然科学的には，司祭が何をしようと，それは同じパンであるが，信仰上は，同じパンが現存するイエスの体，すなわち「聖体」に変化する．これを「聖変化」と呼ぶ．聖変化したパンは，もはやキリストそのものであるから，信者はこれを受けるとき，最大限の尊崇の念を持ち，それを態度で示さなければならない．

キリストがパンの形となって自らの身体に入り，共にいること，そのように思えること，そのような信仰は，信者を霊的に強め，信者の日々の生活，行動に具体的な影響を与えるものと考えられる．そして，信者は悪事を成さぬようにと思い，聖書の説く愛の行い，善行を果たそうとするのではないだろうか．この意味で，聖体拝領は司祭の手を介した神と人間の究極のコミュニケーションと言える．『教会憲章』がミサを「キリスト教的生活全体の源泉であり頂点である」（前掲）と言うのも頷けよう．

### 4.4　その他の所作

ミサの中では，会衆は多くの所作を行う．司祭の「父と子と聖霊の御名によって」という発語に合わせて，額，胸，左肩，右肩の順に右手の指をおいていく十字を切る所作は，ミサの中で複数回行われる．「父」のときに額，「子」のときに胸，「聖霊の御名によって」のときに，左肩，右肩と手を動かす．これは，キリスト教における三位一体の神を信じることを動作として表す信仰告白，信仰宣言となっている．

また，祈祷文の中で「イエス・キリスト」ということばが読まれる際に頭を下げる所作が一部の信者の間で行われてきた．関連して，2022年11月27日

の日曜日のミサから「使徒信条」と呼ばれる祈祷文の中で「主は聖霊によってやどり，おとめマリアから生まれ」と唱える部分で一同は頭を下げることになった．これは，神の子，また神のことばであるイエス・キリストが人間としてマリアの胎内に「受肉」(「処女懐胎」) したことについて，「神の恵みに深い感謝を向ける，ローマ典礼に伝統的な礼拝行為」(日本カトリック典礼委員会 (編)，2021:31) であるという．このような所作をミサのたびに繰り返すことで，信仰心を強めていくことが期待されているのだろう．逆に言えば，そのようになるよう，ミサでの所作が規定されている．俗な言い方をすれば，「身体で覚える (覚えさせている) 」わけである．

## 5. 司祭と一般信徒の関係

3.神のことばを聞く儀式としてのミサ及び4.神と人とのコミュニケーションでは，現代のカトリック教会における神および神のことばと人間との関係について，ミサと聖書を中心に記述した．その中で，ミサを司式し，福音書を朗読する司祭は，いわば「神と人間の仲介者」であることが看取されたものと思われる．以上を踏まえ，本章では，司祭と一般信徒との関係について，特に，「ことばとパワー」「コミュニケーションの非対称性」について念頭に置きながら分析を行いたい．

### 5.1 司祭叙階

「司祭」とはミサ聖祭を司る者，司式する者の意味である．司祭になることを志し，神の計画の実現に全生涯を捧げ，神の道具となることを決意した者は，神学校や修道会において修練を積み，認められれば司祭としての資格を与えられる (カトリック教会ではこれを「叙階」と言う)．司祭には結婚は許されず，女性は司祭になれない．プロテスタント教会ではカトリック教会の司祭にあたる牧師には女性もなることができ，また，結婚も許されていることと対照的である[8)]．

### 5.2 司祭の権能

司祭に叙階された者は特別な権能を持つ．その権能は多岐にわたるが，主なものは2つである．1つはミサを司式でき，聖変化を司る能力である．また，4.2で記したとおり，ことばの典礼における福音書の朗読は，原則として一般信徒はこれを担えず，司祭だけが行うことができる．3.2にも記したとおり，イエス・キリストを救い主と信じるカトリック教会において，最も重要なのは，イエスの生涯，活動，言動を記した4つの福音書である．ミサにおいて司祭だけが福音書を読むことができるという事実は，「発話の権利」の観点から，司祭の特別な地位・立場を表象していると解釈できる．

福音朗読の後に行われる「説教」を司祭のみが行えると定められていることも重要である．これに関して『カトリック新聞』は「教皇フランシスコ『説教の長さ10分以下に』」と題する記事の中で，「説教は「秘跡に準ずるもの」で，「祈りのうちに準備され，使徒の精神で準備されるのです」と教皇は強調する．」と教皇フランシスコの談話を紹介している (第4658号，(1)面，2023年2月12日発行，カトリック新聞社)．

やむを得ない状況のために，司祭不在で集会祭儀が行われる場合においてのみ，福音朗読は一般信徒も担うことができる．但し，説教については，「司祭があらかじめ準備した説教を読み上げるか，司祭とともに準備した，福音朗読に基づくふさわしい勧めのことばを述べることができる．」(日本カトリック典礼委員会 (編)，2018) とされており，一般信徒が独自に「説教」を行うことは認められていない．

司祭のもう1つの大きな権能が，ゆるしの秘跡を行うことである．ゆるしの秘跡とは，信徒が犯した罪を司祭に告白し，司祭はそれを聞いて必要な償いを指示し，これを通してその人の罪を神に代わってゆるす宗教儀式である．ゆるしの秘跡の根拠は「ヨハネによる福音書」20章23節にある．

> だれの罪でも，あなたがたが赦せば，その罪は赦される．だれの罪でも，あなたがたが赦さなければ，赦されないまま残る．
> (聖書，2001:(新)105)

自らの罪を認め，それを誰かに伝えるという行為

は，誰にとっても困難なことに違いない．だが，カトリック教会は，復活祭やクリスマスなどの重要行事の前など，またこれに限らずたびたびゆるしの秘跡に与るよう信徒に促している．また，正式なカトリック信者となるための儀式である堅信式の前には，必ずゆるしの秘跡に与る必要がある．つまり，罪を告白せずして一人前の信者[9]になることはできないのである．

ゆるしの秘跡では罪を告白した後，司祭と信徒の間で次の対話が行われる（ドン・ボスコ社（編），2022:88-89）．

**司祭**　それでは，神のゆるしを求め，心から悔い改めの祈りを唱えてください．

**信徒**　神よ，いつくしみ深くわたしを顧み，豊かなあわれみによってわたしのとがをゆるしてください．悪に染まったわたしを洗い，罪深いわたしを清めてください．

**司祭**　全能の神，あわれみ深い父は，御子キリストの死と復活によって世をご自分に立ち帰らせ，罪のゆるしのために聖霊を注がれました．神が教会の奉仕の務めを通してあなたにゆるしと平和を与えてくださいますように．わたしは，父と子と聖霊のみ名によって，あなたの罪をゆるします．

**信徒**　アーメン．

**司祭**　神に立ち帰り，罪をゆるされた人は幸せです．ご安心ください．

**信徒**　ありがとうございます．

このように，信徒は司祭を介して神とコミュニケーションをとっている．他方，司祭は神の代行者として信徒をゆるしている．

広島市にあるカトリック教会の一司祭は，本論文の筆者に，「司祭に叙階されて嬉しかったのは，ミサを司式できるようになったことは勿論だが，それ以上に，ゆるしの秘跡により人の罪をゆるす権能を与えられたことであった」と述懐された．これは，人は誰もが神に対して罪を犯し，罪の意識を感じるものだが，ゆるしの秘跡によって人の罪をゆるし，その人を罪の意識から解放させ，その人が新たに歩んでいくことに貢献できる喜び，奉仕できる喜びについて語られたものであった．

そうであるにせよ，罪を告白する信徒とそれを聞いてゆるしを与える司祭とのコミュニケーションが「非対称」的であることは，明白であろう．

### 5.3　一般信徒は司祭に対して常に追従的か：ボリビア多民族国の事例

ミサを司式し，福音書を朗読し，それを解説する説教を行い，パンを聖体に変え，また，神に代わって人の罪をゆるすことのできる司祭と一般信徒との関係は，ともすれば支配－被支配の権力関係や，上下関係を招来する危険がある．具体的な事例の記載は差し控えるが，2020年代においても，カトリック司祭による信徒へのパワハラ，特に国外において，永年にわたる幼年者に対する性的虐待の事実が大々的に報道された．カトリックに限らず，宗教上特別な権能を与えられ，信徒との間に権力関係が生じうる指導的立場にある宗教者は，自らの行動・言動を厳しく律さなければならない．

また，カトリック司祭の宗教的確信とそれに基づく行動が一般信徒との間に緊張関係を生み，対立に至ることもある．以下に紹介するのは，1955年に創設されたボリビア多民族国のサンフアン日本人移住地で生じた事例である．以下は，国本 (1989:231) からの引用である．

> 近年になって表面化したカトリック教会と日本人の間で発生している確執は，「解放の神学」的発想と行動をとる神父の着任と学校運営に関わっている．移住地内に住む貧しいボリビア人を救済するために富める日本人移住者の奉仕と日本人の富の配分を求める神父の言動が，日本人を刺激してきた．市街地に集中するボリビア人の生活環境の劣悪さと年々増加するボリビア人人口という状況から発生する諸問題の解決をめぐって，しばしば日本人とボリビア人とはこれまでも対立してきたが，1982年に着任した神父が無条件にボリビア人側につ

いたことから深刻な対立関係へと発展した．その結果，敬虔なカトリック信者である日本人信者たちまでもミサに出席しないという事態を引き起しており，相互不信が緊迫関係にまで発展している状態が1986年から87年に観察された．

本論文の筆者がボリビアのサンフアン移住地を初めて訪問したのは，上の記述から25年以上が経過した2012年のことであった．しかし，筆者の滞在中，この司祭のことが話題に上ることがあった．ある移住者は，「村内ラジオを聞いていたら，突然，日本人の悪口が聞こえてきた．最初は何かの間違いだと思ったが，それが連日，また，ミサの説教の中でも繰り返された．腹が立って，それからミサには出なくなった」と語った．当地のカトリック教会は，小川 (2013) が報告しているとおり，潜伏キリシタンの子孫である長崎県出身の熱心なカトリック信徒を中心に発展してきた．上記のように筆者に語った移住者も，そのお一人であった．

以上，この節では，司祭と一般信徒との対立について，具体的な事例を紹介した[10]．その意図は2つあり，1つは司祭と信徒は主従関係にあるわけではないこと，いま1つは，叙階の秘跡により特別な権能を与えられた司祭や敬虔な信仰者であっても，やはり人間であり，誤りを犯す可能性があることを示すためであった．以上のことを認識しておくことは，盲信を防ぎ，見えない（あるいは無意識に従っている，従わせている）権力関係に気付くために，あらゆる宗教における宗教指導者，一般信徒にとって重要であろう．

## 6. おわりに

### 6.1 結論

本論文の目的は，ローマ・カトリック教会において，人は，神の声を，いつ，どのように聞くのか，その際，司祭はどのような役割を果たすのかについて明らかにすることであった．この問いについて，端的に答えれば，以下のとおりである．

旧約聖書の時代，神の声は物理的音声として預言者の耳に届き，神と人間は対話することさえできた．しかし，現代ではそのような事象は起こりえず，神の声は人や出来事を通して「感じられるもの」である，というのがカトリック教会で広く受け入れられている捉え方である．

他方，ミサには神が現存し，ことばの典礼において聖書が朗読されるときは神が人間に直接語りかけているのだ，と教会は教える．ことばの典礼の頂点は福音書の朗読であり，福音書の伝えるメッセージを信徒が理解できるよう，司祭による説教をはじめ，教会は様々な工夫を凝らしている．信徒は現存するキリストの体を自らの体内に取り入れる聖体拝領とことばの典礼からなるミサへの参与を繰り返すことによって，イエスの説いた福音のメッセージを理解し，イエスに倣って生きる術を身に付けてゆくものと考えられる．

そうした経験を積み重ねることにより，「悩んでいるとき，迷っているとき，聖堂の中で一人静かに祈っていると，どうしたらいいか，どの道を選べば良いかを自ずと悟ることができる．そこに神の働きかけ，導きがある．」(2.1.4) ということに繋がってゆくのではないだろうか．福音書の説く精神，生き方がその人に血肉化されていれば，悩んだとき，迷ったとき，判断するときに，その精神・生き方で対処することができる．それを，「神の働きかけ，導き」と呼ぶのではないか．2.1.5にひいた教皇メッセージは，そのように解釈できる．

他方，神のメッセージは4つの福音書を中心とする聖書のテキストを通じて現代を生きる信徒に伝えられる．そのメッセージはときに難解であり，司祭はその理解を助けるための役割を担う．また，特別な権能を持つ司祭は，そのために信徒に対して権威的な存在となり得ることを意識しなければならない．

### 6.2 課題

本論文は，聖書や教会の公文書の記述などを基盤として分析を進めたので，半ば文献研究となった．今後は，本論文の成果に則り，司祭や信徒への質的・量的調査に基づいて分析することが必要である[11]．その際，国内外の複数の地域のカトリック教

会を比較する視点[12]，またミサ典礼の所作・ことばの史的変遷をたどり，その意味を分析する視点を持つことも重要であろう．

他宗教，他宗派に関する研究，それらとの比較研究も必要である．その際，以前より宗教を中心課題として研究を蓄積してきた宗教学，神学，文化人類学等の知見を生かし，また，心理学，社会学，教育学など関連諸分野の研究者との共同研究が必要となるだろう．2022年現在の時代状況に照らし，敢えて付言するならば，地域や家庭における宗教問題が頻発する国内外の状況下にあって，これを抑止し，解決・改善するための学際的な社会言語科学が求められている，と言うことができるだろう．

## 謝　辞

調査にご協力いただいたボリビア，ブラジル，アルゼンチン在住の日本人移住者の方々，広島・長崎・大阪などのカトリック教会の司祭，信徒の皆様に心より篤く御礼申し上げます．また，改稿の過程において，編集委員会ならびに査読者の先生方にたいへん有益なご指摘とコメントを賜りました．感謝申し上げます．なお，本研究はJSPS科研費JP23720234, JP15K16761, JP18K00620の助成を受けたものです．

## 注

1) 南米での調査は2012年2月よりボリビア多民族のサンフアン日本人移住地を中心に継続してきた．同移住地では5回，アルゼンチンのウルキサ移住地では1回の現地調査を実施した．ブラジルではサンパウロ市在住の日本人カトリック信者（長崎県五島列島出身の移住者）と日本人修道女に対する聞き取り調査を3回実施した．これまで南米には計6回訪問．滞在日数は各回10日前後である．他方，国内での調査は，広島市内のカトリック教会にて2021年4月より開始した．
2) 2021年4月より，広島市のカトリック教会にて毎週水曜日の午後7時から8時に開かれるカトリック入門講座（講師は同教会の主任司祭），同教会における日曜日の主日ミサに参加した．また，注1に記したボリビアの日本人移住地にあるサンフアン教会の主日ミサにも参加してきた．
3) 本論文における「神父」，「司式者」はいずれも司祭を指す．カトリック教会内での正式名称は「司祭」であり，「神父」は司祭を呼ぶ際に用いられる尊称である．
4) 本論文における聖書の引用は，すべて，共同訳聖書実行委員会・日本聖書協会(2001)『聖書 新共同訳』（ハンディバイブル版）による．『聖書 新共同訳』の初版の発行は1987年である．煩雑な記述を避けるため，本論文において聖書を引用する場合，「聖書，2001:ページ」と記載する．該当ページ部分の（旧）は旧約聖書，（新）は新約聖書を表し，これは2001年版の記載方法を採用したものである．なお，2018年にカトリック教会とプロテスタント諸教会が参画・協働して翻訳された『聖書 聖書協会共同訳』が出版された．しかし，現在でもカトリック教会のミサにおける聖書朗読では『聖書 新共同訳』が用いられているため，本論文の引用も『聖書 新共同訳』によった．
5) 2002年3月に教皇庁から発行された『ローマ・ミサ典礼書』の規範版第3版を翻訳したもの．
6) https://www.youtube.com/watch?v＝x7VEXiQ4xjc（司祭による説教は18:10頃から）
7) 筆者および公開年不詳．http://www.fugenji.org/thomas/diary/image/mass-roudoku.pdf（2022年9月28日）
8) カトリック教会の中でもリベラルな考え方をする人の中には女性司祭容認論者もいるが，数は少ない．また，これに関連してミサにおける信徒による聖書朗読や，ミサ中の祭壇での奉仕（ミサで使用する十字架や杯などの聖具，聖体の持ち運びなど）について，女性がその役割を担うことが正式に認められたのは，2021年3月のことであった．このような点から，カトリック教会は男性優位であると言われてきた．
9) 司祭より洗礼を授かる「洗礼式」をもってカトリック信者となるが，教会内では信者は堅信式によって聖霊を豊かに受けることにより一人前の信者となると考えられている．
10) 類例として，Badone (1990) には，ラテン語によるミサを求める信徒が，第二バチカン公会議で認められ主流となった現地語（この事例の場合はフランス語）でのミサを執行しようとする聖職者側と対立し，バリケードを造って教会に立てこもり，ラテン語での宗教儀式に協力するベネティクト会の修道士を招くなどし，最終的に警察が介入する事態を招いたことが紹介されている．他方，カトリック教会で伝統的に使用されてきた「イエズス・キリスト」の呼称は，プロテスタントとカトリックの協働編纂によって『聖書 新共同訳』が1987年に出版されて以降，「イエス・キリスト」に切り替えられたが，小川 (2014) は教会の方針に従わず，「イエズス」との呼称を継続使用している信徒と，それを黙認する司祭の存在を報告している．
11) 2022年9月3日（土）に開催された社会言語科学会第3回スチューデント・ワークショップ「「親密さ」を問い直す：5つのフィールドから」において，筑波大学大学院の狩野裕子氏により「神とのアンビバレ

ントな「親密さ」：あるカトリック信者のかたりの場から」と題する報告がなされた．この報告は，報告者がカトリック信者にインタビューを行い，会話分析の方法によって信者と神との関係を探ろうとする意欲的な内容であった．このような研究の蓄積が期待される．

12）たとえば本論文の筆者による調査の限り，日本とボリビア・ブラジルのカトリック教会のミサについて，日本では信徒はややフォーマルな服装で参加，オルガン伴奏による重厚な聖歌合唱，開式定刻前に集合して沈黙と祈りの時間が持たれるのに対し，ボリビアやブラジルではジーンズとTシャツ，ギターとパーカッションによる聖歌（ボブ・ディランの *Blowin' In The Wind*（風に吹かれて）のメロディーに載せて聖歌が歌われたこともあった），開式後にも続々と会衆が集まってくる，またミサ中にダンスが行われるなど，ミサそのものや，ミサを通じて対話する神との関係が日本とボリビア・ブラジルとでは大きく異なっているように感じられた．

**【参考文献】**


雨宮慧 (2021). 主日の聖書解説〈C年〉. 教友社.

Badone, Ellen (1990). Introduction. In Badone, Ellen (Ed.), *Religious orthodoxy and popular faith in European society*, pp.3-23. Princeton: Princeton University Press.

第二バチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会 (監) (2019). 第二バチカン公会議公文書 改訂公式訳 オンデマンド版. カトリック中央協議会.

ドン・ボスコ社 (編) (2022). 祈りの手帖 3訂版. ドン・ボスコ社.

遠藤周作 (1981). 沈黙. 新潮社〔新潮文庫, 同作の単行本は1966年刊, 新潮社〕.

伊藤耕一郎 (2022). 精神世界再考：新潮流としての「霊性にかんする協働組織」の研究を中心に／スピリチュアルのリアル. SRCパブリッシング.

片柳弘史 (2022). 神からのメッセージ：沈黙のうちに. 心のともしび, 771, 4.

カトリック中央協議会 (2011). 教皇ベネディクト16世の256回目の一般謁見演説　聖ジャンヌ・ダルク　2011年1月26日〈https://www.cbcj.catholic.jp/2011/01/26/8089/〉(2022年9月28日)

カトリック中央協議会 (2018). 第55回「世界召命祈願の日」教皇メッセージ「主の呼びかけを聞き, 識別し, 生きる」〈https://www.cbcj.catholic.jp/2018/04/22/16454/〉(2022年9月28日)

カトリック中央協議会 (不明). マザー・テレサ〈https://www.cbcj.catholic.jp/catholic/saintbeato/mother/〉(2022年9月28日)

カトリック中央協議会　司教協議会事務部広報課 (2022). カトリック教会現勢：2021年1月1日～12月31日　カトリック中央協議会〈https://www.cbcj.catholic.jp/wp-content/uploads/2022/08/statistics2021.pdf〉(2022年9月28日)

国本伊代 (1989). ボリビアの「日本人村」：サンタクルス州サンフアン移住地の研究. 中央大学出版部.

共同訳聖書実行委員会・日本聖書協会 (2001). 聖書 新共同訳 ハンディバイブル版. 日本聖書協会.

MISSIONARIES OF CHARITY (不明). OUR FOUNDRESS MOTHER TERESA OF CALCUTTA 〈https://missionariesofcharity.org/our-foundress-more.html〉(2022年9月28日)

百瀬文晃 (2021). キリスト者必読 生涯学習のためのキリスト論. 女子パウロ会.

日本カトリック典礼委員会 (編) (2004). ローマ・ミサ典礼書の総則 (暫定版)　カトリック中央協議会〈https://www.cbcj.catholic.jp/wp-content/uploads/2004/05/sosoku2.pdf〉(2022年9月28日)

日本カトリック典礼委員会 (編) (2005). 朗読聖書の緒言 改訂版第2刷. カトリック中央協議会.

日本カトリック典礼委員会 (編) (2018). 司祭不在のときの主日の集会祭儀 (試用版)：「ことばの祭儀」の形式 (聖体拝領を行う場合)　カトリック中央協議会〈https://www.cbcj.catholic.jp/wp-content/uploads/2018/11/shukai_test3-1.pdf〉(2023年3月2日)

日本カトリック典礼委員会 (編) (2021). 新しい「ミサの式次第と第1～第4奉献文」の変更箇所：2022年11月27日 (待降節第1主日) からの実施に向けて. カトリック中央協議会.

小川俊輔 (2013). 南米に移住した長崎のキリシタン家族：ボリビア多民族国サンフアン日本人移住地の事例. キリスト教史学, 67, 134-156.

小川俊輔 (2014). キリシタン文化と方言形成：Jesusの歴史社会地理言語学. 小林隆 (編) 柳田方言学の現代的意義：あいさつ表現と方言形成論, pp.265-290. ひつじ書房.

Sakaguchi, Alicja (2015). *Sprechakte der mystischen Erfahrung*［神秘体験の言語行為］. Baden-Baden: Verlag Karl Alber.

谷口静浩 (2019). ハイデッガーの思惟と宗教への問い：宗教と言語を巡って. 晃洋書房.

戸田義雄 (1975). 宗教と言語. 大明堂.

和田幹男 (2017). 主日の聖書を読む：典礼暦に沿って【B年】. オリエンス宗教研究所.

山元眞 (2022). 出会いを続ける：カトリック入門講座　イエス・キリストの福音と出会い (第16回). 聖母の騎士, 87(6), 5-7.



（2022年10月4日受付）
（2023年5月6日修正版受付）
（2023年5月29日掲載決定）